

牛群検定通信 No156

～ 春先に注意すること (2) ～

お彼岸も過ぎ、春の農作業に忙しい時期となって参りました。また、だいぶ暖かくなってきて、というより、日中は半袖で過ごせるような陽気で、西日本では春本番といった感じです。特に今年は冬が結構寒かったのに比べ気象庁が記録を取り始めても一番というくらい暖かい3月となり、関東や東北の方とは幾分季節感が違いますが、この時期は冬の寒さから解放され、寒冷のストレスがなくなった分、牛の調子が上がりますので、注意が必要です。

牛の調子が良くなると、エサ食いも良くなり、乳量も増えて酪農家にとって良いことですが、そこに落とし穴があります。先月の牛群検定通信でも述べましたが、乳量が増えるということはそれだけカルシウムが牛の体内から出て行くということです。牛が低カルシウム状態になっていないか、いつもより観察を多くし、気を付けましょう。カルシウムが不足しているようなら、カルシウム給与量は増加しなければなりませんし、1月、2月分娩でこれから種付けを行おうとする牛は、予めカルシウム給与量を増やしておいた方が無難です。

また、日中の温度が20℃を超えるような日は昼間に送風機を作動させ、牛の体に熱を蓄積させないようにしなければなりません。乳量が30kgの牛は20℃を超えると、体温、採食量、乳量に影響が出ることが分かっていますので、早めの対策が必要です。乳量が30kg程度の牛で20℃からですので、それ以上乳量の出ている牛は、もっと低い温度でも影響を受けている可能性がありますので、早め早めの暑熱対策が必要です。乳牛の暑熱への影響は28℃を過ぎてから出てくる、といった間違った常識は30年前の知識で、現在の牛では通用しませんし、それを信じて対策を行わなかった場合、大きなマイナスの影響を受けますので、注意が必要です。また、この時期の対策を行わなかった場合、7月、8月になってから出てくる暑熱の影響が5月末頃から出てくる等、早く出てくるようになるとともに、回復も11月下旬までかかるなどマイナス影響の時期が長くあることがありますので、暑熱の影響をできるだけ短くするためにも、この時期からの暑熱対策が必要です。

一方、この時期は冬毛から夏毛に完全に切り替わる時期ですので、栄養的には蛋白質が多めに必要となります。また、この時期気温が乳牛にとって過ごしやすいものとなり、乳量が増えてくると更に蛋白質の要求量が増え、しかも、種付けをしなければならないような牛では、エネルギーも必要となりますので、飼料給与の量及びバランスを取ることが、非常に難しくなってきます。カルシウムやビタミン、蛋白質の給与量を増やし、毛色や毛艶を注意深く観察するなど栄養バランスのチェックをより一層細かくする必要があります。牛の調子が良くなったときほど、落とし穴があるということを、肝に銘じましょう。

(渡邊)